

昭和三十三年における国語学界の展望

言語生活

宇野義方

昨三十二年の言語生活の展望の最後を、芳賀綏氏は、次のように結んだ。

こうして、研究の頂点をいつそう高めることが期待される一方に、次第に底辺の広がりが増し、抜きがたい根が張られつつあることが感じられる。明年度の〈言語生活〉展望が執筆されるとき、そこには、どのような、豊富な内容が盛り込まれるであろうか。

本誌の学界展望は、早くから始められ、次第に発展して形も整い、毎年続けられているが、言語生活の項目が設けられたのは、昭和三十一年度の分が扱われた第三十集であった。ここで、金田一春彦氏が、三十年までの分を一括して展望されたことは、言うまでもない。

さて、世俗の諺に「三年たてば三つになる」というのがある。言語生活に関する研究を乞食の子に譬えるつもりは毛頭ないが、他所者扱いにされたり、あるいは庶子、継子の待遇を受けるかに

見えたことも、皆無ではなかったように思う。言語生活の展望が三年目を迎えた今日になって考えてみると、種々の問題を残しつつも、右のような点については前年度で、ひとまず落着く所に落着き、本年度は、根が伸び、枝葉が茂り、蕾がふくらみ始めたと言いうことができるのではなからうか。

ところで、いままでの展望の執筆者の中には、いろいろと展望の困難なことを述べている人が何人かある。大所高所に立ち、透徹する眼力をふるうことが難かしいのも勿論であるが、もう一つは、展望の項目の立て方にも理由があるのである。一つの論文なり研究なりが、二つ以上の項目に関連することも少くないのが実情であるとすれば、その分類の容易でないのは、図書の分類などと同じことになる。展望の分類を論ずるのが、この項の主旨ではないが、言語生活の項目を考える上に必要があるので、簡単に述べておきたい。まず、全般的に見るのが総記で、残りを二つに分ける。一つは、主として言語の構造に目を向ける、音韻・文字以下の系列で、国語史や国語学史までを含め、いわゆるオーソドックスな分野である。他の一つは、主として言語の行動に目を向け

る、国語問題・国語教育・言語生活である。後者は、一括して言語生活の分野と考えることができるのであるが、それが右のように分化したと見てよいであろう。このような分化がさらに進むと狭義の言語生活プロパーの部分はどうなるかという問題が出てくる。池上禎造氏が「境界領域をなすか」(『現代国語学』1、101頁)と述べられた分野の扱い方なども重大な問題となってくるであろう。

なお、言語生活を対象とする研究においても、言語との関係が忘れられることはない。そして、言語生活として扱えても、その生活における言語の構造の分析を行うことに中心が置かれる場合も少くない。このようなものは、言語構造の方の展望で扱われることも当然起りうるであろう。以下に述べる展望では、この点に關する明確な線を引きことが難かしいので、適宜な処置をすることと満足することにしよう。

二

言語生活は極めて広い範囲にわたり、その内容も複雑多岐である。混質的と言われるのにも理由があろう。しかし、これを研究する必要があることは既に言われたところで、問題点の整理も、いろいろと行われてきている。前年の池上氏の論文「言語生活の構造」が、その意味では、一つの時期を画するものであったと言えよう。言語生活を如何に組織的に把握するかの問題は、一つの重要なポイントであり、朝倉書店の『国語教育のための国語講座』7に『言語生活の理論と教育』があてられたことは、注目すべき

ことであつた。この一冊は、「言語生活の種々相」「言語生活の歴史」に続いて「聞く生活」「話す生活」「読む生活」「書く生活」のそれぞれと「その教育」との関連を扱つた。つまり、このような分け方そのものが、監修・編集に当られた諸氏の考え方を反映しているものであつて、概観・歴史とともに、いわゆる四形態を立てると言う行き方になつてゐることは、教育面での指導との関連を考へての上であるとしても、一つの大きな線と見ることができであろう。後の四つのもは、教育の展望で扱われることとするので、ここでは、前の二つについて、少し考へてみることにする。

「言語生活の種々相」(菅賀綾氏)には、興味深い資料が縦横に駆使され、一篇の読み物となつた観がある。いま、その構成について見ると、1言語行動と社会生活、2場所がらと言語行動、3音声言語行動と文字言語行動、4個人差・社会差のいろいろ、5伝達の諸相(その一)、6同上(その二)、7マス・コミュニケーションの七項から成つてゐる。言語生活の歴史に關するものは別にあるので、ここでは、その点に關しては大きく取り上げることをしてない。いわば、現代の言語生活総まくりといったところであり、従来問題とされた事がらは、巧みに織り込まれてゐる。ただ、このような構成をとつた原理が明示されていないのが惜しいと思う。これは、直接に根本問題に触れてくるので、そう簡単なことではないが、この論文までを含めて、各種の意見や試みが出されているのであるから、遠くから、確立されるであろうし、また、確立しなければならぬ宿題でもある。ちなみに、いわゆる

四形態の立て方は明白であるが、その方法をとれば、さらに、その内部での問題が残るのである。私は、コミュニケーション過程の考え方が有力だと思っているが、まだ成案を得るには至っていない。

「言語生活の歴史」(松村明氏)も注目すべき業績の一つである。さきに刀江書院の『国語教育講座』第一巻(昭和二十六年)において、言語生活がとり上げられたが、その中に時枝誠記博士の「国語生活の歴史」がある。国語生活史記述の提案の意味で書かれたものであったが、その中で時代区画に関しては、最大のものとして「政治的社会的変革」をあげ、「言語に関する文化の発展」を重視し、国語生活に関する「教育機関の施設の変遷」をも取り上げてある。ところで、松村氏の論文を見ると、その時代区分の方法は、1 奈良時代およびそれ以前、2 平安時代、3 鎌倉室町時代、4 江戸時代、5 明治以後の五分類で、時枝博士の第一に挙げられたところが採用されている。そればかりではなく、細目についても、時枝博士の構想によく合致する。両者とも、国語教育に関する講座中の一篇である点を忘れるわけにはいかないが、教育機関に触れている点も、重要である。以前、新村出博士、吉沢義則博士、保科孝一氏、安藤正次氏などの扱われた言語生活、国語意識等に関する国語史の記述をはじめとして、この方面の研究考察は各処に散見されるが、教育関係のものでは、石川謙博士真下三郎氏たちのものが目立っていた。松村氏は、このようなものの土台の上に、広く資料を見渡して、一つのまとまった「言語生活の歴史」を書かれたわけである。江戸時代以降の分が紙数の

関係で簡略になったのは惜しいが、現段階に於けるまとめとしておそらく最初の記述である点を誇ることができるであろう。

「言語生活の歴史」(岩淵悦太郎氏)も、右の松村氏の論文と合せ見るべきである。これは、筑摩書房の講座『現代国語学』Ⅱ(ことばの変化)の中の一編である。朝倉の講座Ⅶが五月十日初版発行、筑摩の講座Ⅱが七月二十五日初版発行で、二カ月半の間隔があるが、それぞれ独立に書かれたもので相互影響はないものと思う。さて、この論文の時代区分を見ると、第一期(奈良時代)文字獲得期、第二期(平安・鎌倉時代)文字平易化期、第三期(室町・江戸時代)印刷術発達期、第四期(明治・大正時代)印刷文化隆盛期、第五期(昭和時代)ラジオ発達期の五つになっている。これは、時枝博士の「言語に関する文化の発展」と言われたところを第一に取り上げた形になっている。右の区分でも分るように、伝達のメディアとしての文字、印刷術、電気通信の三つが主要な観点となっているのである。この区分と松村氏の区分とは明治以後を分けるか否かの点を別として、鎌倉・室町の両時代のあたりで扱い方が変わっている点に注目すべきであろう。この部分は、もともと問題のあるところであるから、観点や立場の相違によって結果が異なるのは当然かもしれない。どちらがよいかは軽々しく断定し難い点であろう。それはともかく、この論文にも、松村氏とは異なるいろいろな資料が使われている。

いずれにしても、松村・岩淵両氏による「言語生活の歴史」二篇が、時枝博士の提案に対して、七年後に応じたことになったのであって、両々相俟って、この方面の一往のまとめが確立したと

言いうるのである。今後には、さらに資料を収集して、それを精密にすることが残された。

三

中山書店の『コトバの科学』全八巻のうち、第八巻の用語解説索引を残して、七巻が刊行されたことは、おそらく総論でも述べられるであろうが、この項でも、是非とも触れなければならぬ。遠藤嘉基博士をはじめとする、学界の七権威によって編集されたものである。このシリーズの要点は、「刊行のことば」によく示されている。その中に、言葉の研究が、言語科学以外の心理学、社会学、自然科学などの協力を必要とすること、それで従来専門境壁をふみこえて諸研究を総合することを考え、問題の解決に必要な知識と方法とを提供して言葉の科学全体の展望を与えようとしたことなど、注目すべき点を含んでいる。なお、大部分の巻には、巻末に「研究の動向」を加えているが、これは親切であり、また、便利でもある。このように広範囲に言葉に関係のある諸領域を取り上げた講座は、少くとも日本では、今までなかったであろう。ただ、その構成が、私には理解し難い点もある。また、諸研究の総合の実が、どの程度まであがったかについても、考え方によって相違が出てくるかと思う。たとえば、第6巻の『コトバの工学』には、「言語生活の合理化」があるが、その説くところは従来の国語国字問題の分野のことが主である。それはそれでよいとして、「コトバの機械」（小保内虎夫博士）は譚訳機械に関する研究を扱い、「情報理論」（中野道夫氏）とともに、現

在、話題の花形となっているものであることは、よく知られていると思う。ところで、小保内博士の「研究の動向」中には、次のようなところがある。「発声の生理、音声の物理などを、単に生理学や物理学からのコトバの研究成果として報告せず、「コトバの工学」に有機的に結びつくものとしてあつかった。また、標準語や国語国字問題も言語政策論として終らせず、広く「コトバの工学」の面からあつかうことにしたのである。企図したおりの結果になりえたかどうかは別として、目標はそういうところにあつた。」（傍点字野）この言葉の解釈は、それぞれの人に任せるが、私としては、必ずしも謙遜ばかりの言でもないと思う。

いま、ここで、この巻だけを取り上げたのは、不公平であると思われる向きもあろうが、たまたま編集委員の一人である小保内博士の立言が見られたので、一つの例として引用したのである。私はこれをもって、このシリーズが無価値であるとか何とか言おうとしているのではない。それどころか、すぐれた論考が随処に見られるのであり、また、その企画についても有意義であると考えている。それにもかかわらず、こういうことを問題にするのは何故か。もともと、言語構造に関する体系的な研究が、かなりの歴史を持ち、また、かなり進歩していることは言うまでもないであろう。ところが、言語生活に関する研究は、周知のとおり、まだ若くて伝統がない。実用面からの要求によって、それぞれの分野でそれぞれの学者が研究を進めてきているのである。それを一挙にして総合しようというところに困難があつたのではなからうか。工学、社会学、心理学、物理学、生理学等々の学者と、言語学者、

国語学者などが、相互に相当の学問上の交流を行わなければ、右のような困難は除き難いではなからうか。とは言うものの、私は否定的な、破壊的な方向を考えているのではない。部分的にはあるが、その交流が行われかけているのである。その動きがもっと活発になることが、これまで境界領域と考えられていたところの研究を進めるためには、非常に大切なことであろうと思うのである。そのためには、共同研究あるいは分担研究という形が頭に浮んでくるが、そこには、いろいろな困難が横たわっている。その困難を克服して、成果を挙げてゆくことが、今までになかったわけではないが、やはり今後の大きな課題として残されているのである。

『コトバの科学』七冊を目の前に見て、いつも考えていたことを述べたが、このシリーズの中には、言語生活的な考え方が大きな軸として貫かれているように思われる。ただ、従来の見立から言えば、構造面を扱ったとみられるものもかなりある。いずれにしても大部なものであるから、その一々の題名と執筆者名とは『国語年鑑』にゆずることにして、その中のいくつかのものについては、項目ごとに、他の研究と合せて見てゆくことにしたい。

四

前年の座談会「ことばの改善」(『現代国語学』)では、言語生活に関する種々の問題を扱った。その中には、重要な項目がほぼ含まれ、示唆に富む意見が述べられていた。いま、それらを参考にしつつ、問題点を取り上げることしよう。

A 伝達の効率化

文部省の科学試験研究補助金が、国立国語研究所長西尾実氏の「伝達の効率化に関する基礎的言語研究」に対して、昨年につき与えられた。同研究所の年報⁹から想像すると、言語効果研究室の永野賢主任、林四郎、渡辺友左の三氏が中心になって行った「新聞の文章の漢字使用に関する実験的研究」(三十二年度)と、それに続くものともであろうと思われるが、正確なところは、知らない。

「リーダビリティ」(森岡健二氏)、「リスナビリティ」(芝祐順氏)(『コトバの科学』5)の二つは、読みやすさと聞きやすさに関するものである。森岡氏のは、フレッシュユアデールとシャーレルなどの方法を紹介し、日本におけるものとして、氏が国立国語研究所員として担当した調査研究を中心に述べたものである。芝氏のは、情報理論その他が利用されており、最近の研究動向を紹介したものである。ともに、その方面の好適な案内役となるであろう。今後の発展が期待される。

これらの研究の材料としては、新聞や放送が多く使われている。これは、マス・コミュニケーションの担当者が、この点に関する実際のな要求を持つことと合せて考えてみなければならぬが、その成果は、決して、その方面に利用されるだけで終るべきものではない。

B 言葉の機械

言葉の機械といえば、種々のものがある。『国語年鑑』(三十四年版)の展望「話しことば」(大石初太郎氏)が、シンタロリ

ダー、スーパーナカビゾン、オツシロコーダー、自動翻訳機などに触れている。また『言語生活』（七月号）には、カナタイプなどについての論文が見られた。ところで、「コトバの機械」（小保内虎夫博士、『コトバの科学』6）は、自動翻訳の機構を外国での例とともに、日本語についても例示して解説した。同博士に「自動翻訳機のための言語研究」で、文部省の科学研究費（総合研究）が与えられた。電子計算機の発明が、自動翻訳をするのに大きな力となるのである。小保内博士の「サイコロリンギステイクスと日本語」（『言語生活』四月号）は、アメリカのオスグッドらの提唱した、この研究の方法の概要と、日本における、これに関連のある研究の紹介・展望とを述べていて、便利である。なお、別項でも扱われるであろうが、田町常夫氏の自動翻訳に関する業績が見られた。また『機械の言葉と人間の言葉』（ベルヴィッチ、佐々木宗雄氏訳）は、同じくこの方面の解説をしたものである。

自動翻訳に関連して、情報理論（インフォメーション・セオリー）を忘れることができない。「情報理論」（中野道夫博士、『コトバの科学』6）は、この道への平易な入門の手引の役割を果している。素人が読んでも興味深い問題に満ちているが、たとえば「多人数で議論してなるべく早く結論に到達する方法」として、妥協点を「 n の n 乗が全員の数になるような系統の分け方はいろいろな意味で自然である」（ n は2〜5ぐらいの値をとる）とされるのは、話し合いにおける六人制討議法などと比べて、面白く思った。ただ「いろいろな意味」ということの内容が明示されれ

ば更に有難い。それはさておき、情報理論の適用が、『計量国語学』に、いくつか示された。「言語に対する一つの見方(三)」（渡辺修氏、同誌5）、「語を単位とする情報量の問題」（樺島忠夫、松山楊阿氏、同誌6）、「情報と意味—言語行動論の為の序説—」（戸田正直氏、同誌7）など、この方面での研究が着々と進んでいることを示している。

C 言語技術

言語技術に関する論議は、前年には、はなはしく展開されたが、本年は比較のおだやかであった。

話し方に関しては『美しい発声法』（田口御三郎博士）が出た。これは、前年にNHKの国語講座で放送したものが中心になっている。発声法となっているが、個々の音の明瞭な発音のしかた、その他にわたっている。音響物理学の方面からの独自の発音も見られる。なお、ソナグラフの説明が写真入りで行われ、また「日本人の言語生活」という、氏一流の考察があり、標準語に関する意見もある。

書き方に関しては、『文章の構成法—コンポジション—』（森岡健二氏、『国語シリーズ』39）が出た。これは「国語教育編」となっていて、その配慮もあるが、全体の半分近くが、概観と内容とにあてられている。主として外国におけるコンポジションの紹介であるが、内容については、五冊の書物を比較して構成を考えるなど、森岡氏の努力のあとが示されている。その点は、概観における歴史の記述にも反映している。前年の『話しコトバの効果』と並んで、著者の言語技術に関するまとめが、一往出来上っ

たことになる。

なお、旧著を集めたものであるが、大久保忠利氏の『コトバの著作集』が数冊刊行された。その中に『ことばの技術』がある。

ビジネス方面からの要求に応えるものとして、二、三の書物が出たが、『ビジネスマンの話術』（中岡孝正氏）よりは、同氏の『話しを活かす話術』の方がよい。『ビジネス話術』（永田久光氏）は、大分以前の『ビジネス談話術』（清水正巴氏）や『人動かす』（カーネギー、加藤直士氏訳）などの系列に属するものと言えるであろう。

なお、雑誌『PHP』（126）は、「話の方の技術」を特集し、また、（118）では「話し合うということ」を特集した。小さなもので、学術的でもないが、国民の間に広くこの問題が関心を持たれていることの反映とみて、一言つけ加えた。

また、NHKの国語講座では、三月までは「聞き方と話し方」の題目をたて、その後もこの部門で諸種のテーマを選んで放送が続けられた。NHKの「言葉の研究室」では、四月から「ものも言いよう」という標題で放送が続いた。題名と講師名とは、『国語年鑑』の展望「放送」に列挙してある。このほか、日本コトバの会、言論科学研究所、話し方友の会などで、研究会や講習会などが行われた。

D マス・コミュニケーション

これは、新聞・放送関係のものと、広告・宣伝関係のものに大別されるであろう。前者が主として伝達の効率化の点に重点を置くのに対して、後者は効果の問題を重要視する傾向がある。

新聞では「新聞のことばの美学」（堀川直義氏、『コトバの科学』5）に、新聞文章の型や新聞の言葉の実態などが、従来の調査に基づいて述べられた。

放送では、「放送用語の研究」（『文研月報』）が、市川重一、菅野謙、北岡和子の諸氏によって、執筆されたのが目立った。

なお、『言語生活』（三月号）が、「視覚と聴覚」を特集した。テレビとラジオについての座談会その他があるが、「スーパードインポーズの日本語表記はこれでよいか」（斎賀秀夫氏）が映画に関するもので、米・英・仏の作品六本について述べている。

「視覚型と聴覚型」（大内茂男氏）は、心理学の側からの考察でもう一度取り上げて検討すべきであるとする。マス・コミにおける一つの基礎として、いずれにしても考えるべき事であろう。

広告・宣伝の方では、雑誌「宣伝会議」、民間放送諸社のCM（コマーシャル・メッセージ）研究などが目立つ。

統計数理研究所の『改訂版マス・コミの効果』は、直接見ることはできなかったが、しっかりしたものであらうと思う。

なお、『標語キャッチフレーズ研究室』（増田太次郎、渡辺武両氏編）は、解説、批評もさることながら、全体の三分の二以上のページ数を割いて、豊富な実例を掲げている。この方面の資料として、便利なものである。

「広告とPRの心理学」（波多野完治博士）、「効果の測定」（牧田稔氏）（『コトバの科学』5）は、ともに基礎的な方面を受持っているが、後者は、直接言葉にも触れている。

前節までに取り上げられなかったもので、重要なものも少くない。

朝倉書店の前記の講座第3巻に「文字—その本質と機能」（池上順造氏）がある。この中に「文字と言語生活」の項目があり、広い視野のもとに、この問題を整理されたのは、氏の過去の業績と合せて考えれば、うなずける点が多い。

「音声言語研究上の一課題—聞きあやまりと言いあやまり—」（日野資純氏、『国語と国文学』五月号）は、それぞれの誤りの傾向を記述し、その主な因子として、音声的なものと意味的因子とに分け、合せて発話の速度を考えている。このうち、音声的なものについての考察が面白い。

「誤表現と誤解—言語の伝達機能に関して—」（山内潤三氏、『南女短大論叢』）は、未見であるために、題目だけを掲げておく。

文部省の科学研究費（各個研究）を受けた「語音錯聴の研究」（後藤光治氏）もある。

『山下清の文章』（西京大学国語研究室）は、寿岳章子、樺島忠夫の両氏が中心になった仕事であるが、魯鈍な一個人の言語能力と言語行動を明らかにする目的で行われた調査研究の報告であるが、問題の捉え方が新しく、興味深いものとなった。

文部省の科学研究費（各個研究）を受けた「尼門跡の言語生活の調査研究」（井之口有一氏）は、前年に本学会の公開講演会でその一部分が発表されたことがある。

『言語生活』は、毎号特集を出して来たが、「おしゃべり」の分析（一月）に始まって、話は通じるか（十二月）に終わったのは、面白かった。

なお、文部省の科学研究費（総合研究）が「コミュニケーション現象の総合的研究」（千葉雄次郎氏）に与えられた。

『コトバの科学』2は、『コトバと社会』である。「コトバとコミュニケーション」2は、『コトバと社会』である。以下「地域社会とコトバ」（芳賀純氏）、「職業とコトバ」（宮地裕氏）、「特殊社会とコトバ」（岩井弘融氏）、「男性のコトバ、女性のコトバ」（遠藤嘉基博士）、「敬語」（塚原鉄雄氏）、「流行語」（金田一春彦氏）、「外来語」（樺垣実氏）等の考察が述べられている。おそらく別項で扱われると考えるので、くわしくは触れない。同シリーズの4『コトバと論理』の中には、「コトバの魔術」として、大久保忠利、乾孝、森長英三郎の三氏が項目を分けている。

「北海道の言語の実態と共通語化の過程」（岩淵悦太郎氏）が、科学研究費（総合研究）を受けた。これは、北海道に移住した一世と二世、三世の三代にわたる人々についての調査で、ラジオでも紹介された。

六

以上に見てきたところをとりまとめて、本年の特徴的な動向と考えられる点を列挙すれば、次の通りである。

1 言語生活の歴史の概要が、はじめて、しかも二篇、まとめられた。

2 言語生活のほとんど全領域にわたり、関係諸科学をも含めて、一つのまとまった形で解説と展望とが得られた。

3 言語生活の分野で、着実な研究が進められた。文部省の研究費を受ける研究が前年に比べて多くなった。

4 一方、言語生活研究の根本の立場・観点に関する論議は、影をひそめた。

5 これを要するに、本年は、言語生活の研究の基礎が、ほぼ確立した時期と見られる。

ところで、右の1、2は、いずれも講座の仕事になっている。ここ数年、言葉のブームだと言われて、言葉に関する講座類をはじめ、各種の出版が盛んに行われた。いつであったか、時枝博士が、「近頃は講座の類が多く出る。そして、それに学者が動員されるので、本来の研究が進まないのは困ったものだ」というような意味の感想を洩らされたことがあった。それにつけて思い出すのは、故橋本進吉博士が、『日本文学大辞典』の項目を執筆することになり、それに多大の精力を費やして、自分の研究が進まなかったという感慨を漏らされたことがあると、かつて、大野晋氏から聞いたことである。私は、時枝博士の言葉を、暖い励ましのためのものとして受けたのであるが、これらのことをめぐって、多くの問題が考えられるかと思う。いま、言語生活に即して言えば、世間のこの方面に関する要求は、相当に多い。言語生活を向上し、改善し、効率化し、合理化し……と、いろいろな言い方によって示されるのである。研究者が、それにソッポを向けてよいとばかりも言ってはられない事情がある。ある程度までは、そ

の要求に答えたと言えるが、その一つには、関連諸科学の学者の努力があり、他の一つには、講座その他の出版があると見ることもできるであろう。しかしながら、研究者としては、研究を深める方向に進まなければならないのであって、うわついたブームにいつまでも流されてばかりいるべきではないのである。

さて、年が明けて昭和三十四年の二月、国立国語研究所創立十周年の記念行事の一つとして、論文集『ことばの研究』が刊行された。この中に「コミュニケーションの合理性と非合理性」(渡辺友左氏)がある。コミュニケーションが、言語によって行われるばかりでなく、言語ならざるものによっても行われる点に関する考察であるが、ここで取り上げるのは、その内容ではない。論文の末に、執筆の日付が算用数字で昭和三十三年十月三十日を示している点である。つまり執筆時期と刊行時期とのズレの問題で普通には刊行時期をもって基準として展望を書くようである。それが一つの、理由のある立場であるが、私は、前年の展望の総記で阪倉篤義氏が「論文の数がふえるにつれてプライオリティの問題が深刻になるとすれば」と述べられたことを思い起すのである。もっとも、阪倉氏は、一般に、よく知られ難い文献の紹介について述べているのであるが、プライオリティについては、もっと広く考えてもよいはずである。時あたかも、二十六日の夕刊にいわゆる「退職辞令事件」に関する最高裁の判決が報ぜられた。「退職願を教育長に出しただけでは退職の効力は生じない」「退職願いは退職の辞令が出るまでいつでも撤回する自由があり」などとしてある。自然科学の専門誌の中には、学会の受領の時を記

録して、それを論文の公表の時とするものがあると聞いている。渡辺氏の論文については、直接の影響は大してないが、一つの問題と思う。

なお、この展望の執筆について、『国語年鑑』の恩恵を受けたことは、非常に大きい。全く便利だと思う一方で、せめて、全国大学国語国文学会の機関誌などは、次の時から採用してもらえないかと、つくづく感じる。この展望が、もし重要な研究を見落しているとするれば、それは私の責任であって、年鑑のせいにするつもりではないが。

ここに述べたところが、前年の展望の筆者の期待に沿い得るほどに豊富な内容であったかどうかは芳賀氏に直接聞いてみる他ないが、私は、本年の学界に豊富な研究が加わったことについては喜んでいい状況だったと思う。(一九五九・六・三〇)